
REALITY

むう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

REALITY

【Nコード】

N5304Q

【作者名】

むう

【あらすじ】

真実とは・・・。

友情？

恋愛？それとも恋？

色々な試練に立ち向かい、乗り越える
高校生のお話。

別れ

私の名前は笹田^{ささだ} 夢羽^{むう}。

広島に住んでいながら岡山の高校に通う高校1年生。
なんで岡山の学校に通ってるかつて？

それは色々な理由がある。

一つ目は地元の友達と上手くいかなかったこと。

二つ目は高校からは誰も知らないところでやり直したかったこと。
おもにこの二つが理由になる・・・かな？w

「おお！おはよ^^」

今日も通学電車で友達と待ち合わせ^^

海野^{うみの} 友姫^{ともか}は耳からイヤホンを取ると

ポケットにしまい、私の横に立った。

「おはよ^^」

挨拶を交わして私の恋バナで盛り上がる

「ねえねえ、聞いてよお！！」

龍と連絡とれないのお・・・。」

「まじでえ？キツイなあ・・・^^;」

龍とは、私の彼氏で神奈川に住んでいる。

清野^{きよの} 龍^{りゅう}。

龍は26歳で私と10歳もはれている。

元ホストで、今はネット関係の仕事をしている。

複雑な話、龍には2つ下の彼女がいて、

いわゆる二股をしているのだ。

その彼女の名前は有紗^{ありさ}。

2人は5年も付き合ってきて今は同棲中とのこと・・・。
私と龍との出会いはネット・・・。

今時なにも珍しくない。

「そろそろお別れかな・・・。」

「大丈夫だよ。だって夢羽ちゃん頑張ってるじゃん。」

「頑張ってるだけじゃダメなんだよ・・・。」

「意外に現実的w」

「現実見なきゃっ」

ガラー

電車のドアが開いて柴田^{しばた} 春^{はる}が乗ってきた。

「あ！w」

「現実見てない人が！！w」

「え？春？夢羽ひどくね？ww」

「よし！別れる！」

「「ええー？」」

「なぜに？急に？」

「だって・・・。夢羽のこと好きじゃなさそうだもん^^」

「そっか・・・」

3人で学校に向かった。

1時間目は理科。

はぁ・・・。

テンション上がらない^^；w

よしw

自分の気持ちでも整理しますか！w

大好きなんだけど、この頃龍の何を

信じていいのか分からなくなっちゃった。

このまま、待ってても同じような気がする。

広島に来る前に別れたほうがいいと思う。

なんやかんや言って有紗ちゃんのこと

好きなんでしょう？

有紗ちゃんの話する時の龍すっごく楽しそう。

それに、有紗ちゃんには勝てないや^^；

ずっと一緒だったんだからいいんじゃない？

本当はやだけど夢羽と付き合ってる時、

他の人おもわれる嫌だから・・・。

夢羽、どんなに短くてもいいから

連絡ほしかった。

仕事忙しいのも分かってる

無理ゆってるのも分かかってわがままってゆうのも

わかってるけど、やっぱり子供だから・・・。

夢羽のゆってほしいこと言ってくれるし、

本当に大好き？

でも、龍はそうじゃなさそう。

自分勝手だけど、被害妄想ってゆうと思うけど

そう思われてもいいやw

どんどん夢羽の中で龍が大きくなるの。

そのたびにいなくなったらどうしよう・・・。ってなる。

だからさ、有紗ちゃんを幸せにしてあげなよ。

もう他の人好きになっちゃだめだぞ！

好きなのにさよならするのは嫌だけど、

夢羽なりに考えた結果だから。

どうせ、龍「別れよう」ってゆっても止めないでしょ？w

夢羽ね、髪の毛切ったんだよ。

ショートのカブにしたらんだ^^

龍、可愛いつてゆってくれたよねw

ちゃんと龍の事忘れないように切ったんだぞ（笑）

夢羽なりのけじめw

またどこかでばったり合ったときはさ、
笑って話せるといいねー^^
幸せな4ヶ月をどうもありがとう。
すっごく幸せだった。
次はその幸せを有紗ちゃんにね^^
さよなら 馬鹿龍

気持ちをまとめたメールを友姫に見せると
「夢羽ちゃん……。泣きそう」
ってゆってた。
これでいいんだ。
そう自分に言い聞かせるように
メールを送信した。

支え

携帯の着信になる・・・。

ディスプレイには龍の名前。

いつもみたいに冗談言ってくれるのかな？
それとも、本当にお別れ？

携帯を開く手が止まる・・・。

今までの出来事が頭の中をよぎる。

初めて話をした日。

付き合おうって言われたこと。

好きな音楽が一緒だったこと。

2人だけの秘密。

いっぱいいっぱい想い出があって

本当はまだ好きで・・・でも、このままじゃダメで・・・

自分の意見がまとまらないなか、

携帯を開いた。

俺は、夢羽のこと本当に好きだった。
でも、やっぱり有紗と別れることは

出来ない。

自分から告ってるのに、ごめんな・・・。

なんで？

そんなの勝手すぎるよ・・・。

私の頑張りは全部無駄なの？

なんの意味もなかったの？

そう考えると涙がでてきた。

好きなのに一緒にいれないっておかしいよ・・・。

携帯がなった。

相手は保育園から仲のいい幼馴染の

甲田^{こうた} 利緒^{りお}からメールだった。

利緒ってゆっても男の子だけどねw

夢羽うゝ

元気かぁ？

なんてタイミングいいんだろう。

どっかで見てるのかな？w

元気じゃないよぉ^^；

別れちゃった・・・。

まじか・・・

俺は、夢羽が今まで頑張ってるの
知ってるからそれが報われなくて
悲しいなあ・・・。

夢羽のことだから泣いてるんだろ？

お前が泣いてると俺まで悲しくなるから
泣くな。

夢羽みたいに思ってくれる子は
そんなにいないから俺は龍が
うらやましいよ。

龍はもったいないな。

俺が付き合いたいくらいだww

いつも利緒は優しいなあ・・・。
利緒の言葉で涙がでるよ。

ありがとう

小さい頃からずっと利緒に
たよってるなあ^^；
私もすっかりしなくちゃなあ・・・

裏切り

人に裏切られることは慣れているはずだった。

友達からも彼氏からも・・・。

だって、中学の時からそうだったから・・・。

小さい頃から自分の意見をはっきりと言う子だった。

悪いことは悪いと・・・言えば良いと思っていた。

中学3年の時、それはなんの前触れもなくやってきた。

「奈々つてうざくない?」

始まった。女子の会話。こつゆつ会話が苦手だった。

自分より弱いものを見つけて、自分がのし上がる。

そんな考え方が嫌いだった。

自分の気に入らないことがあれば悪口をゆつ。

正直めんどくさかった。

「ねえ、そう思わない? 夢羽」

「えっ? あっ・・・。夢羽は何も思わないかな。」

あたりさわるのないことを言って、

どちらともに付かず、どちらからも好かれたかった。

コレが本音だと思う。

私が一番最低だ・・・。

奈々とは川田 奈々(かわだ なな)。

可愛くて人懐っこくて、男の子にもモテるような

タイプの女の子。人のことを悪く言わないから

私は好きだった。少し憧れ? もあったw

そんな奈々が悪く言われたした理由・・・。

それは・・・

奈々は1人の時間が好きな子だった。

別に嫌われてるからとゆう理由でもなく、人に気を使うのが嫌だったからだと思う。

でも、女子は楽しくないのに一緒に笑ったり

トイレに行ったり・・・流行に敏感で話が合わないと少し変な目でみられる。

これに合わせるのがしんどくなっただと思う。

だんだんとグループから孤立するようになった。

ノリが悪いからとゆうそんな些細なことだった。

奈々が1人でいるのはおかしい！

そう思った私は、奈々に声をかけた。

「おはよ^^」

「夢羽・・・。うちなんかかわんでいいのに」

「なんで？夢羽は奈々と話したいから来ただけだしw」

「ww。ありがと」

それから私は奈々と一緒に行動するようになった。

毎日どちらかの家で遊んだり、授業中に手紙交換したり・・・だんだんと仲良くなり、奈々が心を開いてくれはじめていた。

その頃、私と奈々のいたグループではターゲットが奈々から

私にかわり、孤立させようと考えていた。

私はきつと大丈夫。

何を根拠にそんなことを考えたんだろう・・・。

私はだんだんとクラスから孤立するようになった。

でも、奈々は違う。

私のそばからいなくならない。
そう信じてたのに・・・

今までのことは何もなかったかのように
前のグループに戻っていき、

まるで私なんか空気のようにあつかわれた。

悲しくてしんどくてつらい時、

いつも変わらず助けてくれるのは

その時に付き合っていた岡本 おかもと 健太 けんた だった。

健太とは中2になってから付き合い始めた。

健太からの片思いから始まり、周りからのフォローもあり
今にあたる。

健太は明るくて気さくで誰とでも仲のいい
クラスの中心人物のような存在だった。

どんなときでもそばで励ましてくれていた。

「健太・・・。1人になっちゃった・・・。」

きつと期待していたんだろう。

健太ならいつものように「大丈夫！俺がいるからっ。」

ニコッと笑って言うてくれると・・・

「もおさぁ終わりにしねえ？」

「・・・えっ・・・？」

「お前というせいで俺まで孤立してきたわ。」

「・・・ごめん・・・。私・・・」

「もおお前の話なんて聞いてられんわ。」

今こうやって一緒にいるのも今日で最後だから。」

「つつう・・・うう・・・」

別れは突然だった。

健太は私の前から消えていった

次の日から私の孤立はエスカレートしていた。

それは・・・あのクラスの中心人物

健太のせいだった。

ありもしない私のうわさを流し、

みんなはいつも私のそばにいた

健太の言うことを信じ、どんどんと離れていく・・・

辛い日々が続いた。

友達も大切な人も一気になくしてしまった

なにもやる気がおきず、食欲もなく

食べては吐いての繰り返しだった。

でも、親になんて言えるわけもなく

保健室に通うようになった。

中3とゆうこともあって、受験で塾に通っていた。

それでも、学校のうわさが流れ私の席が

みんなの荷物置きにされたり、大きな声で悪口をゆわれたり・・・

だんだんと塾にもいかず、外で時間をつぶして

帰る日々が続いた。

それからとゆうもの、人からどう思われているか
過剰に反応するようになり、人に合わせることで
安心感をもとめて自分を守ってきた。

1人になることが怖かったから・・・

だから、私のことを知らないところでやり直すために
岡山の学校に通っているのだ。

もちろん、今までのこと全て親に言えるわけもなく

「友達いっぱい毎日たのしいよ」

と明かるい子を演じてきた。

だって、心配かけたくないから

自分の子供が嫌われてるって思われたくないから

高校生になった私は今、たくさん友達に囲まれている。

クラスで副委員長をやって結構充実した毎日を送っている。

そこには今までの私はいない。

でも、たまに楽しくないのに笑ったり、

人にあわせてしまうくせがでてしまう・・・。

そんな自分が嫌になる。

今までの全てを受け入れてくれたのが龍だった。

そんな大きな存在をなくした今、頑張れるはずもなく
前にもどりつつあった・・・。

助けて・・・

たすけて・・・

タスケテ・・・

「おっはよ^^」

電車、途中まで一緒にしょ？

一緒にいこ^^」

「あ・・・。う、うん^^」

私に声をかけたのは、保育園からの友達。

野崎のざき 倅香ゆきか。

彼女とは家も近く今でも仲のいい私の唯一
親友と呼べる人だ。

倅香とは学校が違うがたまに
こっやって一緒に電車であう。

「夢羽・・・。少しは元気であ？

カラ元気してない？」

「ん・・・。ちよつとだけ？w」

「私さあ、夢羽に紹介したい人がいるんだ。」

「誰？」

「いや、別に付き合うとかじゃなくて、

ちよつといいかな？って私が夢羽に

オススメする人なんだけど・・・。」

「ああ・・・。メールするくらいなら・・・^^;」

「おっけー！」

そう言つて倅香は私の携帯にメールを送つた。

y u u . 0 9 0 2 @

「これにメールすればいいの？」

「そそっwんじゃ私、おりるね^^」

「帰りにまたメールするから一緒に帰ろうね？」

「うん^^」

「どうしょ・・・」

「送ったほうがいいの・・・かな？」

「はじめまして夢羽です。」

「倅香から聞きました。」

「よろしく(´・・・´)」

「メールを送り終わると、電車は最寄の駅に付いていた。」

謎の男

おお？

本当にメールきたっ

むっちゃ嬉しい^^

いつも倅香から夢羽ちゃんの

話聞いてるよ

俺の名前は田村^{たむら} 結時^{ゆうじ}

よろしくねえ^^

うわぁ・・・

正直軽そうな男の子だと思った。

女の子に慣れてるとゆーか・・・^^；w

まあ、メールするくらいなら
いいかな？

そうなんだw

私の何をゆってるのかは
知らないけどね^^；w

「夢ーーーーー！」

後ろを振り返ると春がいた。

「もぉ！夢だけで呼ばんでよぉ」

「へへwだって呼びやすいもん」

春は2次元にとっぷりつかっている。

どっぷりねw

本を読んでは「〇〇くんのキャラいいっ！」
ってゆってるw

「昨日は、クーデレってたまらないw
萌ポイントだっ！」ってゆってたっけな？w

「夢羽もさぁ、2次元にはまればいいのにw

そしたらさぁ、辛いよ？」

「ん・・・。やだw」

「このぉー！！」

いつもこんな感じで学校に向かっている。

今日は私の気分とは裏腹に澄んだ青色だった。

「おっはよー^^」

クラスのみんながぞくぞくと教室に入ってくる中
私は気分が乗らなかった。

「夢羽、帰ろっかなぁw」

「え？なんでw」

後ろの席の友姫が体を乗り出してきた。

「テンション上がんない^^;」

「まじかぁ・・・。たまにはいいんじゃない?w」

「うんwじゃあ、帰るw」

「先生にゆう?」

「んー。適当にゆつといてw」

「おっけーっ!」

こんなこと初めて。

もう少しで高1もおわり2年になる。

こんなことでやっていけるのだろうか・・・

ブー
ブー

ポケットの中で携帯がなっている。

(結時)

ディスプレイに表示された。

暇だなwこいつw

今日さあ、倅香と一緒に

帰るんだろ?

俺も一緒に帰っていい?

ああ・・・

倅香に電話しなくちゃっ

忘れてたw

一緒に帰るんだったw

プルル プルル

「もっしもーし」

元気に倅香がでた。

「今日さあ、テンション上がらないから
帰るわぁw」

「まじかよwそんな理由で帰れるの？」

「だって、先生にゆってないもんwwww」

「うわぁーwwまあ、気をつけて帰りよ？」

「おっけー^^」

あ・・・

誰だっけ・・・

結蒔か

メール返さないと・・・

ごめん・・・。

今日は今から帰るんだ。

また今度ね

ホームに座っているとふわふわと雪が
振ってきた。

「・・・・・・・・キレイ・・・・・・・・」

思わず声がでてしまった。

ピー

駅員さんの笛がなって電車がホームへ入ってきた。

プシューっ

ドアが開いて暖かい空気が私をむかい入れてくれる。

ちょうど席が開いていたので座り、ポケットからウォークマンを取りだし、耳にイヤホンをつけた。

流れ始めた曲は、龍の好きだった歌。

悲しくて切なくて・・・

でも、今でも変わらず好きな私。

私と龍との最後のつながりのようにおもえた。

龍・・・

今なにしてる？

仕事してる？ご飯食べてる？それともまだ寝てるかな？

何かあれば思い出してしまう・・・。

そんなことを考えていると・・・

どれくらい時間がたったのだろう。

私の降りる駅の3つ手前のホームで電車が止まっていた。

「あのお．．．。」

知らない男の人が私の目の前にたつて
なにか話しかけている。

イヤホンを耳からはずした。

「なんですか？」

「夢羽ちゃん．．．だよね？」

「え．．．．。」

知らない男は私の横に座った。

唐突

「俺だよ？」

「誰？」

誰・・・。

何で私のことを知ってるの？

恐怖と不安でいっぱいだった。

「だーからー俺！

結蒔だってw」

「・・・え？結蒔くん؟؟？」

「そうだよー！！」

「ごめん^^；知らなかった」

私の勝手なイメージだけど
すっごくチャライメージだった。

でも、意外にも黒髪の似合う
どっちかって言うと優等生？タイプの人だった。

「なんかちがう・・・。」
つい本音がでてしまったw

「あははははw w」

「ってか、何でいるの？」

「ん？えつと・・・一緒に帰るって
約束したから？」

ああ・・・。

やっぱコイツ馬鹿だ・・・。

見た目だけかよw

「学校は？」

「ん？遅刻だったからめんどくさくて行っていないw」

電車には人がいなくて私たち2人の会話しか
聞こえない。

「夢羽ちゃんはさ、彼氏いるの？」

「え・・・っ。え・・・つとお・・・。

んー。別れたばっかかなw^^；」

「あ・・・。ごめん・・・。

でも・・・」

「でも？」

「よかった^^」

「はあ？」

あっ・・・。

初対面の人に「はあ？」ってゆっちゃった・・・w
でも、なんでいいわけ？
意味がわからない。

すると、結蒔は立ち上がって私に手を差し出した。

「俺、夢羽ちゃんのが好きでした。
付き合ってくださいっ!!」

「……………はあ？」

えっ……………なんで？」

好きでした？」

んー????？」

「前から私のこと知ってるの？」

「うん……………」

私はずっと前から結蒔と出会っていた。

それは9年さかのぼった6歳の夏でした。

夏の日

「俺が夢羽ちゃんのことを好きになったのは
9年前のことなんだ・・・。」

9年前の私は小学1年生でママと花火大会に行っていた。

「ママー！！夢羽、浴衣きたあーい！！」

「はいはいw可愛くしょーね^^」

「うん！」

バーンッ

パチパチパチ・・・

花火が空に上がっては消えていく・・・。
ざわざわと人のしゃべる声。
ふと気づけばママとはぐれていた。

「ママ？ママ・・・？」

私は花火に見とれていて迷子になってしまった。

「う・・・っ。ふえーんっ」

心細く知らない人たちの中で怖かったのか、
泣いてしまった。

「大丈夫か？」

私の目の前に現れたのは、小さな男の子だった。

「う．．．っ。うん．．．。」

「どしたの？」

「ママがね．．．ママがいなくなったの」

「僕も一緒に探してあげるよ^^」

「だからさ、泣かないで？」

「うん」

男の子は私の手をひっぱって歩き出した。

たどり着いたのは小さな神社で、階段に座った。

「足が．．．。」

慣れてないゲタをはいた私の足からは血がでていた。

「大丈夫？」

「うんw平気」

男の子は私の顔を覗き込んでニコッと笑った。

「名前はなんてゆーの？」

「夢羽！あなたは？」

「僕は、結蒔」

「結蒔も迷子になったの？」

「うん。僕はもともと1人だった。」

「1人？ママは？パパは？」

「僕にはパパ、いないんだ・・・。」

「なんで？」

結時は何も答えずにニコつと笑った。
笑っているのに笑っていない・・・。

「じゃあさ、結時が1人になったときは夢羽と一緒に
いてあげるからね^^」

「え？」

「夢羽ね、結時に助けてもらったでしょ？」

「う・・・うん」

「だから、今度は夢羽がね、助けるの^^」

「ありがとう・・・。」

「夢ー！ー！ー！」

遠くからママの呼ぶ声がする。

「あっ！ママだw」

「じゃあ、僕はもお行くね」

「うん^^ありがとう。結時」

「じゃつ。ばいばい^^」

「ばいばい」

小さな手をめいっぱい振ってさよならした。

「あっ！！！！思いでした！」

思わず声をあげてしまった。

再会

「つとゆうわけw思い出してくれた？」

結蒔の一言で我に返った。

「う、うん」

「俺さあ、あの時から好きなんだよねえ」

「はあ……。つつえっ？」

「なーんてねw夢羽ちゃん彼氏いるでしょ？」

「……。いたけど別れたよ？^^;」

無言の車内……

空気さえ重く感じた……

「ごめん……。」

「なんで謝るのよw」

「いや……。話したくなかったでしょ……」

「まあ……。でも終ったからしょーがないw」

なんてゆってるけど、さっぱり忘れたわけじゃない。
未練たらたらなのはイヤだ。
そんな自分はもったいやだ。

でも、でもどうしようもなかった。

誰かに頼るわけにもいかず……

「俺さあ、人信じれないんだよね。」

「うん」

「だから信じれる夢羽がすごいと思う。」

「うん」

「だからさ、俺が言うの变だけど信じるの止めないでほしい」
「・・・うん」

そうだね。

信じるの止めちゃったらだめだね。

信じるのって難しいし、辛いし、よくわからないことが
たくさんあるけど

温かくて、嬉しくて、幸せなことなんだよね・・・。

「うん！頑張る^^」

自分の気持ちには嘘をつかない。
そんなキモチを再度確認できた。

「あ・・・。そろそろ降りなきゃ」

「だなーw」

そういつて2人で電車をおりた。

切り替え

電車を降りると今日も駅は人であふれていた。

このまま私が見えないように隠してくれればいいのに・・・

「夢羽？」

名前を呼ばれてやっと我にかえた。

私たちは改札に向かって歩き出す。

改札を抜けて急に結時が振り向いた。

「つで返事きまった？」

「ん？」

「俺、前の彼氏がどんなやつかとか、どれだけ好きだったかは分からんけど、夢羽が悲しい顔するのは見たくないな。

少しずつでもいいから、俺の事見てくれないかな^^;？」

「・・・・・・。スキになれるかわかんないよ？」

「それでもいい」

「わかった」

「まあ、コーヒーでも飲みますか！w」

そついつて駅の近くにあるカフェにむかった。

「結時は彼女いないの？」

「ん・・・^^：彼女いるのに夢羽に告るって最低じゃね？」

「wwwwそうだねw」

正直付き合ってる感じはしなかった。

でも、結時と話していると龍のことを考えずにすんだ。

自分勝手だな・・・私。

喫茶店に入ろうとすると向こうから見回りの警察がやってきた。

「やばw」

結時の声と同時に手をひっぱられた。

「夢羽走れる？」

「無理かなw足首悪いんだよね」

「一緒につかまるかw」

「ちよつとー！！君たち」

「はい・・・」

私たちは警察に連れられて歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5304q/>

REALITY

2011年10月8日16時09分発行